453

益畑遺跡

（肝属郡串良町細山田字下中1221-1他）

位置と環境

本遺跡は，串良町の役場より北東側へ約６ｍのところに位置し，標高約53ｍの舌状台地上に所在している。遺跡の西側には，串良川が蛇行しながら流れており，串良町と東串良町にひろがる水田地帯を見下ろす位置にあり，低地との比高差は約40ｍを測る。

調査の経緯

本遺跡は，昭和52年度に県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査により発見された。

緑資源公団は，本遺跡を含む大隅中央区域において，農用地総合整備事業を計画し，平成８年度に事業実施計画に伴う分布調査を行った。

その結果，工事計画区内において遺物散布が確認され，周知の遺跡である益畑遺跡をはじめ，瓜々良蒔遺跡，細山田段遺跡など遺跡の所在が判明した。

この結果をふまえ，協議により工事着手前に，本町教育委員会が調査主体となり，県教育委員会の協力を得て，平成13年度には確認調査を，平成14年度から平成15年度にかけては本調査を実施した。

調査は，調査対象区域を便宜的に５か所の調査区に分けて本調査を実施した。

調査の結果，縄文時代早期前半から近世にかけての複合遺跡で，遺構・遺物などが確認された。

なかでも，本遺跡から発見された縄文時代早期前葉の集落跡の一部と思われる遺構群は，県内でも希少な発見となった。

・調査の概要

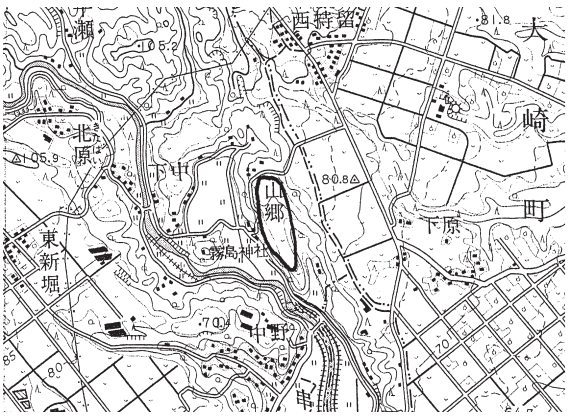
起因事業名　公団営農用地総合整備事業
（大隅中央農道建設）

起因事業者　緑資源公団九州支社
（現　独立行政法人緑資源機構）

調査対象面積　約12,000㎡

調査面積　約 5,505㎡

調査期間　平成14年４月１日から
平成15年３月28日
平成15年４月１日から
平成15年10月８日



第１図　益畑遺跡の位置

遺構と遺物

縄文時代早期の遺構は，竪穴住居跡２軒，連穴土坑16基，集石遺構85基，土坑160基などを検出した。

１号竪穴住居跡は，長軸464㎝，短軸287㎝，深さ約67㎝を測り，竪穴部の２面にベッド状の張り出しがある。当該期の住居跡としては，規模がやや大きく，１号竪穴住居跡の埋土中にはＰ13（約9,400年前の桜島起源の噴出物）がレンズ状に堆積していることが確認され，床面は桜島の噴出物である薩摩火山灰層（約11,500年前）まで，しっかりと掘り込まれていた。

１号竪穴住居跡では，埋土中にあるＰ13の下位から前平式土器（約9,800年前後）が出土した事実から縄文時代早期前葉の古い時代から竪穴住居で生活していたことが判明した。このことは，上野原遺跡とほぼ同じ状況での発見であった。

２号竪穴住居跡は，長軸470㎝，短軸330㎝，深さ約27㎝を測る。１号竪穴住居跡と同様にＰ13が埋土中に認められたが，薩摩火山灰層までの掘り込みはみられなかった。この２号竪穴住居跡は，66号集石遺構と切り合って検出された。この66号集石遺構は，掘り込みの径が約135㎝，深さ約26㎝で，掘り込みの底面には13～15㎝程度の偏平な角礫が敷いてあり，他の集石遺構と様相を異にするものである。

連穴土坑は16基を検出した。これらの連穴土坑には，単体で検出されているもの（第３図）と，何度か造り替えが行われて切り合っているもの（第４図）とがある。

連穴土坑２号は，長軸117㎝，短軸82㎝測る梵き

口部と長軸72cm，短軸92cmを測る煙道部からなり，これらをトンネル状につなぐブリッジ部分も残存していた。

第４図は連穴土坑４・５・６・16号が切り合って検出されたもので，検出状況から少なくとも３回の造り替えが行われていることがわかる。

集石遺構85基のうち，早期前葉の時期のものは，９基を検出し，いずれも５～10cm程度の安山岩・砂岩・花崗岩などの礫で構成されており，掘り込みをもつタイプが多数を占める。

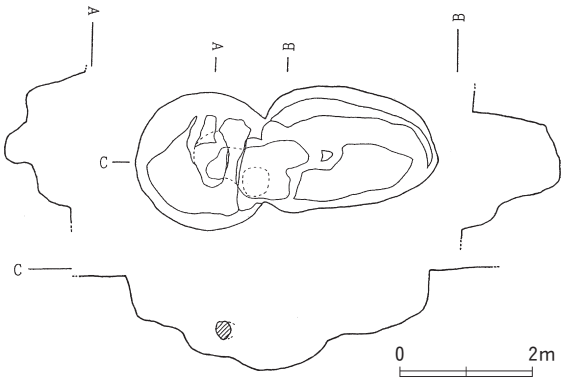
掘り込みは，径約80～150cm，深さは約15cm程度のものから深いものでは約130cmもあった。集石遺構のなかには，わずかながら土器片や，黒曜石・チャート等の剥片などが出土した。

土坑は160基（早期前葉97基）検出したが，石器製作跡と考えられる土坑２基，そのほかの土坑95基がある。石器製作跡と考えられる土坑から，黒曜石やチャートの剥片などが100点以上が出土している。

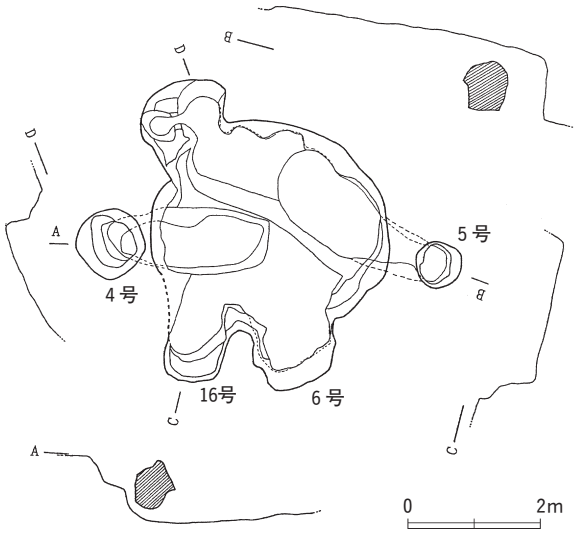
検出した土坑の規模は，掘り込みが径約80～150cm，深さは約15～約20cmのものが多い。

77号土坑（第６図）は，76・78号土坑と切り合った状況で検出された。その規模は，77号土坑が長軸150cm，短軸135cm，76号土坑が長軸約150cm，短軸約115cm，78号土坑が長軸約135cm，短軸80cmをそれぞれ測る。

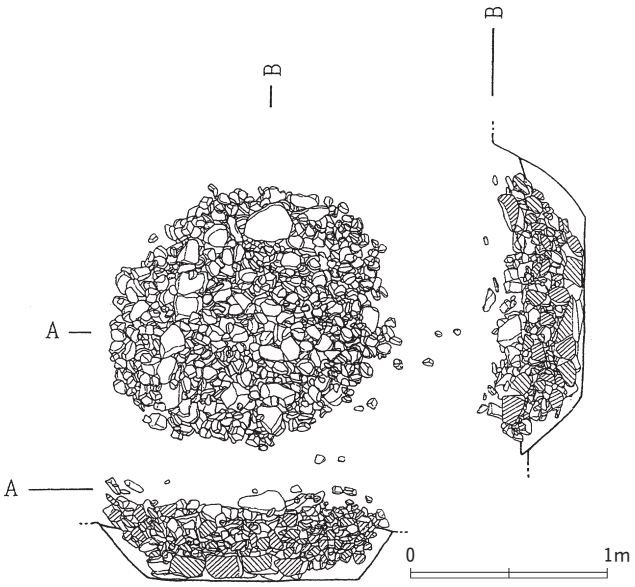
縄文時代早期の遺物は，前平式土器，加栗山式土器，吉田式土器，石坂式土器，下剝峯式土器，辻タイプ，桑ノ丸式土器，塞ノ神式土器などの土器をはじめ，石鏃〈磨製石鏃〉，石皿，磨石，敲石，石斧，ハンマーなどの石器や黒曜石，チャート，蛋白石などの石材も出土した。



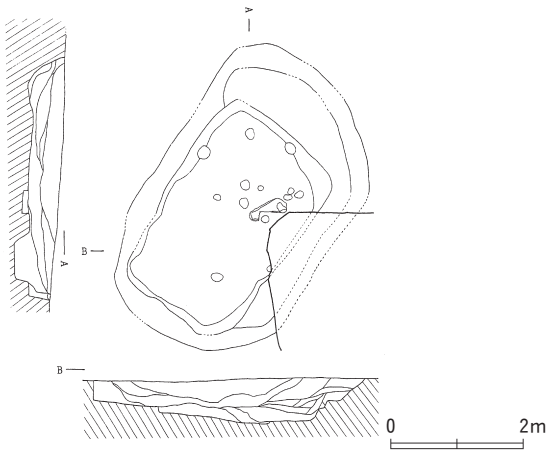
第３図　連穴土坑２号実測図



第４図　連穴土坑４・５・６・16号実測図



第２図　66号集石遺構実測図



第５図　早期１号竪穴住居跡実測図

縄文時代の特徴

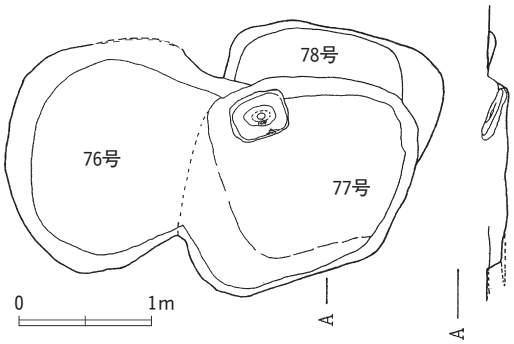
1　竪穴住居跡の発見

埋土中にP13（9,400年前の桜島起源の噴出物）が良好な状態で堆積しており，9,400年前以前に造られた竪穴住居跡であることが確認された。

※　上野原遺跡の竪穴住居跡とほぼ同時期の遺構である。

※　１号竪穴住居跡は，Ｐ13がレンズ状に堆積し

写真２　益畑遺跡全景



第６図　76・77・78号土坑実測図

ていることから，降灰が直に降ったのではなくある程度の時間差を想定させる。

2　連穴土坑が，繰り返し造られている。

薫製料理を作る施設が一時期だけでなく，ある程度の期間この場所にとどまって，使用して生活をしていた証が考えられる。

3　集石遺構が存在する。

蒸し焼きが日常的に行なわれていたと考えられる調理施設である。

この１・２・３が集落形成をする上で必要不可欠な条件であり，調査対象地外にも広がりが推定される。

※　本格的な集落跡の発見は，大隅半島で初めての発見である。

※　大隅半島で確認されている早期の連穴土坑を検出した遺跡は，志布志町倉園Ｂ遺跡10基，末吉町地蔵免遺跡１基，大隅町の番屋下中段遺跡の３遺跡である。

資料の所在

出土遺物は，串良町歴史民俗資料室に保管・管理されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査概要」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』25

（稲村博文）

写真１　77号土坑出土遺物

写真３　５号連穴土坑完掘状況